

社会科

NAVI

ナビプラス

小学社会



学習問題はどう設定する？



本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索



※本冊子掲載QRコードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。

※QRコードは、株式会社デンソーウェブの登録商標です。

一人ひとりの子どもの疑問を大切にしたい問題解決学習

名古屋大学大学院教授 柴田好章

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

問題解決学習における子どもの素朴な疑問の生かし方

歴史学習の素朴な疑問から学習問題へ「子どもの素朴な疑問」からスタートしてみよう。

1 6年教科書 160 ページと 161 ページには、2 枚の 絵があるね。いつの時代を えがいたものだろう。

2 着ている服が ちがうね。

3 二つの絵では、 建物もちがうね。 左は瓦屋根、 右はれんがづくりだ。

4 大人にまじって 子どももいるね。 調べてみたいことが たくさんあるよ

5 みんな、たくさんの 疑問が出ましたね。

6 これで単元の 導入としては、 うまくいったぞ!

7 ちょっと待ったー!!

8 今のままでは、 子どもたちが それぞれ 調べたいことを 勝手に調べて いてしまうよ。

9 本当だ。 たくさん疑問が 出たのはいいけれど、 このままだと バラバラになって しまう。 どうすれば いいんだろう……。

10 たとえば、みんなの いろいろな疑問を、 大きな一つの問題に できないかな。

10 そうか! 子どもたちの疑問を 集めた大きな学習問題を つくればいいのか!

「江戸」と「東京」って、 同じ場所ではないのかな。

左の絵は「江戸時代の 終わりごろの江戸のようす」、 右の絵は「明治時代の東京の ようす」と書いてあるよ。

二つは、 わたしは、 建物や 乗り物の変化に ついて調べたいな。

じゃあ、わたしは、 子どもたちのようすや、 食べ物について 調べてみよう。

ニチビー



楽しく、ためになる 社会科学習のために

「学ぶ」ということは、知らなかった何かを知ることであり、できなかった何かができるようになることです。本来は人間にとって「楽しい」ものです。しかし残念ながら、学校での学習に楽しみを見いだせていない子どももいます。社会科の学習を、学習本来の、生き生きとした実感のあるものにするために、どのようにしたらよいでしょうか。

「楽しい」とは、決して「楽」であることを意味してはいません。困難なことを乗り越えて、みんなで力を合わせて調べて、考えたからこそわかったことの喜びが増します。子どもにとっても、そして教師にとっても、社会科学習が「楽しく」「ためになる」と実感できるものになるためには、どうしたらよいでしょうか。

素朴な疑問を出発点に

まずは、マンガの②～④にもあるように、単元の導入では、提示した資料（写真など）から子どもが気づいたことを自由に話し合える機会を設定します。資料は子どもたちにとって魅力的なものになることが望まれます。

そしてこの段階では短い発言でもよいので、できるだけ多くの子どもが、できるだけ多くの気づきを発言できるようにすることが大切です。

しかし、マンガの⑧のように、子どもたちがそれぞれの疑問を勝手に調べ始めてしまうと、関わり合いや深まりの少ない学習になってしまいます。そこで、楽しく、もっとためになる社会科学習は、どのようにしたらできるのか、考えていきましょう。

子ども一人ひとりが問題を発見し、追究・解決する社会科学習を実現するには？

社会科の学習では、身近な生活のこと、普段は目にするのでできないこと、遠くのこと、昔のことなど、子どもたちの知的な好奇心を誘うたくさんのことを学びます。知ること、調べることは、社会科学習における重要な学習活動です。

しかし、たくさんを知って、単に「物知り」になることが、社会科のねらいではありません。より

よい社会の実現に向けて、社会の一員として思考し判断できる資質・能力の育成が求められています。学習指導要領でも資質・能力を育成するために、問題解決的な学習が求められているように、子ども一人ひとりが問題を発見し、追究・解決する社会科学習が大切です。子どもたち自身の「学びたい」という気持ちを引き出し、その気持ちに寄り添って学習を展開することが大切です。

子どもの疑問にもとづく授業づくりの大切さ

子どもが主人公となる社会科学習では、学習の出発点は、何よりも一人ひとりの子どもの疑問です。与えられた課題だから学ぶという受け身の姿勢ではなく、一人ひとりの子どもが自ら問題を発見し、「学びたい!」「考えたい!」と思えるようになることが大切です。各単元の導入では、教師が示した資料や、子どもが会った人や事実から、素朴な疑問をたくさん見つけ、そこから追究したい問題へと高めていくことが大切です。社会科における問題解決学習を通して、自ら問う子どもを育てることが、今日求められる資質・能力の育成の基盤となります。

社会科授業づくりのポイント

社会科の学習を、子どもたちの資質・能力を高める魅力的な学習にするためには、子どもたち一人ひとりひとりが学習の主人公になることが大切です。一人ひとりの子どもの疑問を大切にしたい問題解決学習のポイントを示します。

- 子どもたち一人ひとりの素朴な疑問から学習が始まる。
- 素朴な疑問を組織化し、学級として追究する学習問題を構成する。
- 学習問題の解決のために学習計画を立て、見通しのある学習過程を構築する。
- 学習問題の解決に向けた子どもたちの追究に合わせて、計画を見直しながら、学習を進めていく。
- まとまりごとに学習の過程を振り返り、学んだことの成果を確認するとともに、次の学習の見通しを立てる。





↑図1 子ども一人ひとりの疑問を大切にする社会科学習

一人ひとりの素朴な疑問を大切に する社会科学習

単元の導入は、社会的事象との出会う場面です。

資料をもとに、できるだけ多くの子どもが、できるだけ多くのことに気づき、それを出し合うことが大切です。たとえ短くても、そして羅列的であっても、たくさんの発言が出てくるのが望まれます。

素朴な疑問は、「事実・資料からの気づき」から生まれる他にも、図1に示したように、「生活経験」、「以前の学習」、「社会への問題関心」などと関わりながら生まれてきます。

たとえば、江戸時代や明治時代の絵を見て、自分たちの現代の暮らしとの共通性や差異から、様々な気づきが生まれてきます。それらは、当時の時代背景に迫っていく有効な手がかりになっていきます。

素朴な疑問の背後にある 子どもの関心や願い

また、素朴な疑問の背景には、その子の願いや関心、またその子らしい個性的な論理が潜んでいます。たとえば、「もっと便利な暮らしがしたい」というのは、生活者としての願いです。「安全で安心できる暮らし

がしたい」というのは、よりよい暮らしを望む意志です。このような関心や願いが、様々な気づきや疑問を生み出す原動力になります。対象（社会的事象）に対する子どもの関心は、社会の中で生きている人としての願いによって支えられています。対象へどのように向かい、対象からどのような気づきを得るかに、その子の関心や願いが反映しています。またそこには、その子らしい物事の捉え方、すなわち個性が現れてきます。

学習問題がなぜ必要か？

子どもたちが学びの主人公になる授業では、子どもたちの素朴な疑問から出発することが、何より大切です。しかし、先にも述べたように、それぞれの子どもが思いついた素朴な疑問をバラバラに調べ始めるだけでは、追究の質は高まりません。

- 学習活動が、表面的な疑問の解消にとどまり、問題の解決に向かわない。
- 知識・情報を得るだけで、思考・判断にまで学習が深まらない。
- 単元の終末まで、子どもの関心が持続しない（燃料切れ）。

一人ひとりの子どもが調べたいと思ったことを自由に調べるほうが、一見すると一人ひとりのニーズに合わせた学習を展開しているようにも見えます。子どもたちの問題意識が十分に高まるとともに、調べ方・考え方も育ってきているのであれば、そのような追究が有効である場合もあるでしょう。しかし、子どもたちの力をより引き出し、高めていくためには、お互いの問題意識を関わらせて、学級としてみんなで追究したい問題、すなわち学習問題を設定することが必要です。

素朴な疑問から、みんなで追究したい価値ある学習問題の生成

先にも述べたように、素朴な疑問を出し合う段階では、短くても羅列的でもよいから、できるだけ多くの子どもができるだけ多くの気づきを発言し、共有することが大切です。そして、学習問題を形成する段階では、学級全体の話し合いを通して、数多くの疑問を整理していき、全体を包み込むような問題を作り上げていきます。これを通して、互いの問いを持ち寄り、みんなで追究したい問いへと高めていきます（図2）。

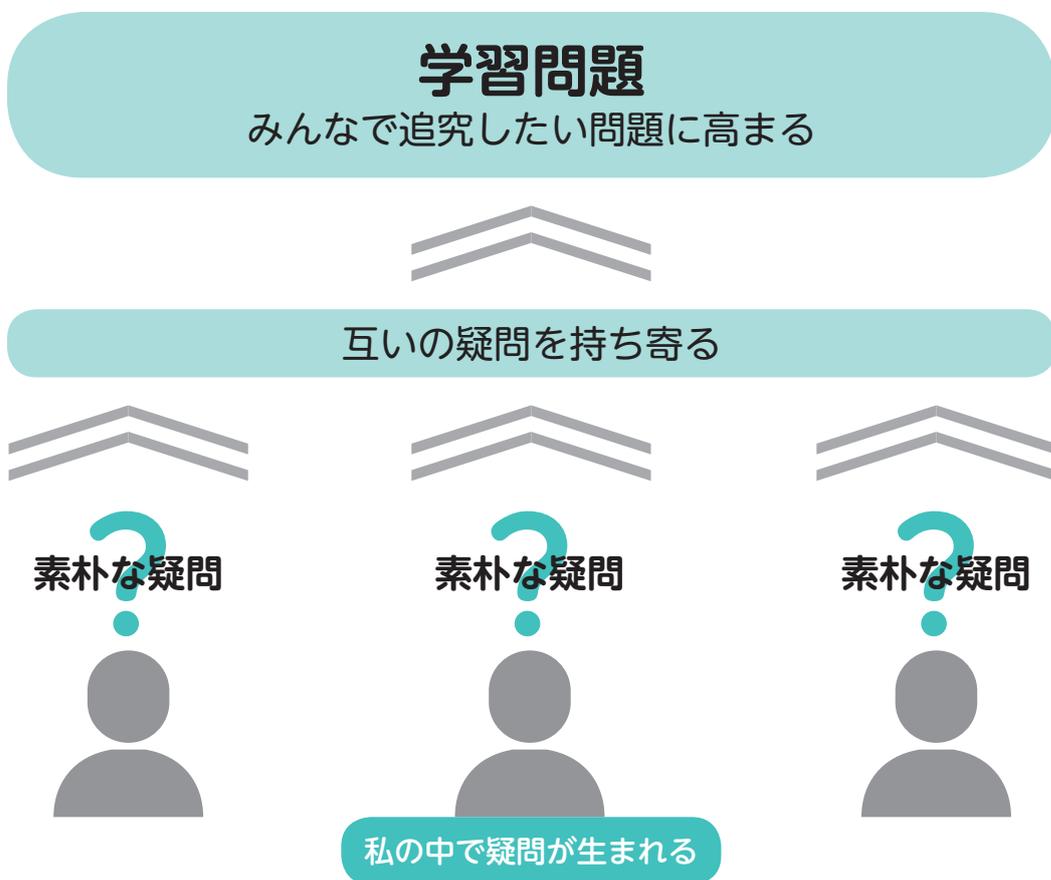
ここでは、子ども同士の意見交流が大切です。他の子どもの意見を聞くことによって、「言われてみればそうだなあ!」、「やっぱりこれを調べたいな!」などのように、子どもたちの気づきはさらに深まっていきます。

- 共通点を探し出し、似ている疑問を一つにまとめる。
- 小さな疑問を含み込む、大きな問題を作る。
- 時間の順序関係があるもの（ものの作り方など）は、時間の順に並べ替える。

ひとりの疑問を大切に、みんなの問題を解決する追究活動を!

もちろん、一つの学習問題を生成する過程において、子ども一人ひとりの関心から離れていかないことが大切です。学習全体の中に個性が埋没しないように気をつける必要があります。みんなで追究する学習問題は、一人ひとりの子どもにとっても、解決を望むものになることが必要です。

また、できるだけ一人ひとりの素朴な疑問も内包さ



↑図2 素朴な疑問から学習問題へ



れるような包括的な学習問題を作ることが大切です。そうすれば、学習問題の追究活動の中で、一人ひとりの違いを生かすことができます。つまり、全体としての学習問題を解決する過程で、一人ひとりの素朴な疑問も解決されるような工夫することが大切です。

学習問題を作った後には、問題解決過程をデザインするために、みんなで学習計画を立てます。その時にも、一人ひとりの子どもの関心に応じて選択できるように、複数の学習活動を含み込むことが大切です。

個の学びがみんなの学びを深め、みんなの学びが個の学びを深めていきます。こうした循環を作り出すことが、一人ひとりの子どもの疑問を大切にしたい問題解決学習の実現につながります。



柴田 好章 (しばた よしあき)

名古屋大学大学院教授
 専門分野／教育方法学、授業研究
 主要著書／授業分析における量的手法と質的手法の統合に関する研究、風間書房、2002年。授業研究と授業の創造(共編著)、溪水社、2013年。

社会科 NAVI + 小学社会①

日文教育資料 [小学校社会]

令和3年(2021年)10月29日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33577

日本文教出版 株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690